ベランダでも育てられる

みんなのコンテナ菜園

写真・文：園芸研究家●淡野一郎

ミニトマト

初心者は苗から始めよう
マメな追肥と水やりで草勢維持

写真 ©ICHIRO AWANO

トマトの遠い先祖は、南米アンデス高原で生まれました。大玉トマトは、最後に行き着いたメキシコの標高2000m付近で大ぶりに発達したのに対し、ミニトマトは中米を経てメキシコへ至る標高０～2000mのさまざまな環境で広く自生しています。そのため大玉トマトが涼しく乾燥した環境を好み夏は苦手ですが、ミニトマトは過酷な日本の環境でも栽培しやすいです。

ただ丈夫であるが故に果実が付き過ぎ草勢が弱くなりがちです。そこで第２花房の着果から週1回追肥を施して草勢を維持します。果実が割れやすいのも欠点です。特に収穫前が雨だと割れやすいので早めに収穫を。雨に当てないように軒下へ鉢を移動するのも方法です。品種は、草勢が強く、耐病虫害性があり、裂果しにくい高糖度品種を選びます。

病気に強く、裂果が少なく、肉厚で甘みが強い多収のプラム型のミニトマト

【基本情報】

●分類：ナス科ナス属
●原産地：南米ペルー（アンデス高原）、（２次中心）中米・北米（メキシコ）
●発芽適温（地温）：25～30度
●生育適温（気温）：昼間25～30度、夜間13～20度
●日当たり：日なた
●好適pH：6.0～6.5

【病害虫情報】

トマトサビダニ：下葉が褐変し、やがて茎や果実が緑褐色になる。乾燥で多発。真夏はまめに水やりし、発生したら早めに薬散を。

アザミウマ類：果実に蚊に刺されたような白膨れ症状に。ウイルス病も伝染させるので、早めに薬散で防除する。

ミニトマトの栽培方法

1 種まき

直径12cmのポリ鉢に市販の野菜用培養土を入れ、深さ約１cmのまき穴を３カ所開け、１粒ずつ種をまく（写真1）。種に土をかけ、土表面を手で押さえたら水をやる。５～７日で芽が出るまでは土が乾かないよう注意する。出芽後は土を乾かし気味にする。

ポイント　２～３月の種まき・育苗は加温が必要。難しい場合は夜温が確保できる４～５月に若苗を購入し、直径12cmの鉢へ植え替え育苗するか、5月以降に種まきする。

2 間引き

本葉２枚までに1株に間引く（写真２）。

ポイント　子葉が十分開いた頃とその後30日の２回、肥料（ＩＢ化成）１粒を鉢縁に指で押し込む。

3 植え付け

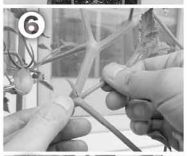
最初の花房のつぼみの色が黄色くなってきたら遅れず植え付ける。直径39cmのポリ鉢に培養土を入れ、中心に深さ約15cmの植穴を開ける。

植穴へIB化成約62gを施し、根と肥料が触れないように土を少し入れたら（写真３）苗を植え付ける。さらに長さ75cmほどの仮支柱を斜めに挿してひもで誘引し、最後にしっかり水やりする（写真4）。

ポイント　本葉３枚の頃、成長点（茎の先端の細胞分裂が盛んな部分）には本葉が８、９枚までできているので、遅れずに間引いて光をしっかり当てる。

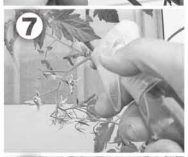
4 支柱立て

茎が伸びてきたら、高さ150cmのリング支柱を立て、外周に沿って茎をらせん状にひもで順次誘引する（写真５）。



ポイント　わき芽は通気や採光を確保し、病虫害の発生を抑えるため早めに取り除く（写真６）。

5 授粉

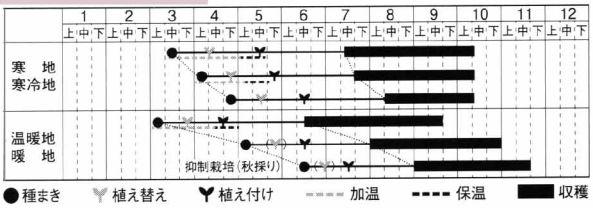


放っておいても実は付くが、支柱を棒で細かくたたくと花粉が舞いよく実が着く。

ポイント　真夏は高温で実が付きにくくなる。ホルモン剤（トマトトーン）を散布して着果を促す。１花房当たり３～４日置きに３～４回花に処理する（写真７）。

6 収穫

最初の収穫は、第１花房開花後50日程度。熟して裂果する直前が味や栄養も最高（写真８）。収穫適期は３日ほどなので時期を逃さず収穫する。

ポイント　第２花房の果実が着く頃から週１回化成肥料（NPK各成分8-8-8）約14gを施し、水やりして草勢を保つ。

栽培カレンダー